

# 特性的楽観主義が符号化処理に与える影響

鍋田 智広

(東亜大学 人間科学部)

特性的楽観主義とは、自分に良い結果が起きると期待する特性である(以下楽観主義とする)。楽観主義と記憶の関連性について検討した研究では、楽観主義の高い参加者は虚偽記憶が少ないされており(鍋田, 2015), 楽観主義の高い個人は情報を選択的に符号化することを示唆しているものの、符号化処理を直接検討してはいない。

本研究では、虚偽記憶手続きを用いて学習材料の示差性の影響を検討することで符号化処理を検討する。虚偽記憶とは、特定の単語(ルアー語, 例: 痛い)に関連した単語リスト(例: 傷, 手術など)を学習すると、その後の記憶テストで呈示されていないルアー語を再生したり再認したりする現象である。虚偽記憶は、リスト語の示差的特徴を符号化することによって抑制されることが知られている。Thomas & Sommers (2005) は単語を文章と一緒に呈示して学習させると、単語のみを学習させるよりも虚再認が減少することを示し、文章が単語と一緒に示差的特徴として符号化され虚偽記憶が抑制されたことを示唆した。

本研究では、特性的楽観性の傾向と文章を呈示することによる虚偽記憶の低下の関連性を検討する。

## 方法

**参加者** 大学生 75 名

**要因計画** 学習条件(文章, 単語)からなる 1 要因参加者内計画であった。

**刺激材料** 鍋田 (2015) からルアー語の関連語 10 語から成るリスト 12 個を用意した。それぞれのリストにおいては、学習時にはルアー語との関連性が強い単語から呈示された。12 個のリストのうち、6 個を無作為に学習条件のいずれかの水準に割り当てた。再認テストでは、各リストのルアー語に加えて、各リストの 3 番目と 8 番目に呈示されたふたつの単語を学習語として呈示した。再認テストのディストラクタ用に 3 つの単語の組を 12 組作成して使用した。それぞれの組は中心となる単語(統制ルアー語)ひとつと、それに関連する単語(統制学習語)ふたつから構成された。質問紙には外山 (2013) の日本版楽観・悲観性尺度から楽

観性を調べる 10 項目及び、多面的感情状態尺度(PANAS)(佐藤・安田, 2001)を用いた。

**手続き** 実験は集団で行われた。参加者全員が着席した後に、参加同意書と楽観主義と気分についての質問紙が配付され、これらに回答した。その後、参加者は文章学習を行った。ここでは部屋の前のスクリーンにひとつずつ表示される文章を読み上げ、文章内の大きく呈示された単語を記憶した。6 リストの文章学習終了後に約 1 分間の遅延課題を行った後に単語学習を行った。ここでは参加者は単語を読み上げ、その単語を記憶した。6 リストの学習が終了したら、約 5 分間の遅延課題を行った。その後、テスト項目が印刷された紙が配布され、再認テストを行った。

## 結果

参加者ごとに楽観主義の得点を平均して求めた。気分評定の結果と楽観主義の積率相関係数を求めた結果、活気のある (.48), わくわくした (.45), 気合の入った (.40), 誇らしい (.29), きっぱりとした (.26) と有意な正の相関が認められた。また、恥じた (-.27) と、いらだった (-.24) とは有意な負の相関が認められた。記憶成績については、参加者ごとに再認項目ごとの平均反応率を求め、ルアー語と学習語のそれぞれにおいて条件間の差を比較した。その結果、ルアー語において有意な差は認められなかった ( $t(74) = -.17$ )。学習語において、文章条件の方が、単語条件よりも反応率が低かった ( $t(74) = -10.30, p < .01$ )。記憶成績と楽観主義についてそれぞれ積率相関係数を求めた結果、有意な相関は認められなかった。

## 考察

本研究では、楽観主義については特定の気分との相関が認められた。しかし楽観主義と符号化処理の関係性は認められなかった。ただし、文章を呈示することによる虚偽記憶の減少が認められなかったことから、楽観主義との関連性について結論することは難しい。

## 付記

本研究は JSPS 科研費 16K04440 の助成を受けた。